

現代（の幼児教育）を 考えるヒント

考えるヒント

周 郷 博

ここには、なんの系統もなく、まったく思いつくままに、

現代―現代の教育―幼な子たちの教育―を「考える」ヒント、かぎになるようなことばを書きつらねてみる。それは「手をとって」（こうしなさい、と）教えるのとは、まるで正反対なゆきかた―読者にとつて「不親切な」やりかたであることとを、私は重々承知している。でも、そうするより仕方ないのです。私もまた、どうしていいか「迷って」いるのですから。怪物のいる、洞窟の迷宮にはいり込んでしまつて、私自身「アリアドネの糸」を手さぐりでさがしているようなもので、手柄話のような、うまい手を授けてやるなど、思いもよらないことだからです。

教育は――子供を対象とする場合でも、おとなを、あるいは個人、もしくは一國の国民を対象とする、あるいは自分自身を対象

とする場合でも――それは起動力キツドウリキ（生きる気、やる気）を生じさせることにある。（そのことによつて成り立つ）何が役にたつとか、何がやらねばならぬことか、何がよいこと（善）か、を示すこと―これが、教育がやらねばならぬしごとである。教育は、みことな行動をひき起こしていく起動力キツドウリキに注意を集中するものだ。どんな行動も、その行動に欠かせられない十分なエネルギーを付与するに足る起動力キツドウリキなしには、持続してやりとげられるものではないからである。

人間という生きものを―他の人であれ自分自身であれ―ただ単に方向をさし示すだけで、そのために必要な起動力が生まれきたかどうかを確かめもせずに、善きものに向かつて導こうと欲するのは、ガソリンのはいっていない自動車、アクセルを踏むだけで走らせようとしているのにひとしい。

―シモース・ヴェイユ「アンラシーヌマン」第三部から―
引用が、少し長くなった。「そんな、まわりくどいことをいわないで、すぐやれるやりかた（機械的な）手だて *codewire*―これは教育の方法ではない、とフランスのガストン・ミヤラレは、飽かずに近著で説いている）を教えてくれ」というかもしれない。がまんして読んでください。

この引用は、シモース・ヴェイユ（1909―1943）の「アンラシーヌマン（われわれは根づかねばならぬ）」からの引用

で、現代の聖人、予言者ともいってよい、彼女のこの一節は、何度読んでも、そこからわき起こってくる泉のように、私の心はうるおされ、生きかえってくる思いがします。彼女は「形而上学者」ではなくて「神秘主義者mystic」だ、とギユスターフ・チボンが書いている。その意味で、現代の高次な「科学者」と同じ線のうえにいる、と私は思う。読んで、チンブンカンブン(馬の耳にネンブツ)の人がいても、私は意に介しない。でも、せめて与えられた「ナゾ」として胸の一隅にもっていてほしい。日本では、その「方向direction」はおろか、起動力(やる気)があつたにしても、ある年齢からは世俗に濁ってしまっていることがおおかたの実情でしょう……。

学校というところへ入る前の子どもたちの生活は、想像力イマジネーションという、彼らを推進するエネルギーによっていきいきと生きている。それが、「彼らの心を、自我の殻かちを脱いで」大きく成長させている。学校というところでは、質の高い想像力の成果 works (科学も、また、人間の想像力に発した人類の業績なのだ)を、子どもたちに開示してみせる。そうして「人間というものの中にある、よきものと偉大なものが可能だということを伝え知らせる」ところだ。

学校というところが、多くの場合、荒涼としたおもしろ味のなところになり、大抵の科学教育と称するものが人間性をだめにするような結果を招いているのは、この想像力というものを、わかりにくい、狭く閉じこめられた美的な活動などというものに閉じこめてしまったことから起こってきているのだ。ところで、想像力というものは、新しい知識がそこで呼吸している空気のようなものなのだ。それ(想像力)は、古いものの味||風味を保存できる塩、だからである。「知識は、サカナほどにも長持ちがしない(じきに味が落ち、腐ってしまう)ものだ」というではないか。

——ウィリアム・ウォルシュ 「想像力の効用—教育の思想と文学精神」から——

このイギリスのリーズ大学のウォルシュの本(彼の処女出版)は一九五九年に出たものだが、出版直後に読んで私は大いに教えられた。というより、啓発され、乗物に乗って読んで読みながら、感動してホームで読みつづけたりした。十二年も前になる。この引用は、その第一章「コールリッジと子ども時代」Coleridge and the Age of Childhood からです。きょうは、「現代(の幼児)教育」を考えるヒント」は、以上の二つだけにしておきます。あなたという人間を通してしか教育は起こらない。「右から左の知識」が「教育する」ことなど、考えることができないはずでしょう。